

(論 文)

祇園梶子試論

—正親町町子との関連から—

宮 川 葉 子

キーワード

梶女書状 梶の葉 祇園梶子 正親町町子 武陵遊士蛙鳴子

(一) はじめに

柳沢文庫に「梶女書状」と仮題された一通の書状が残る。差出人は「梶女」、宛名は「町子君」。「梶女」は所謂祇園梶子、「町子君」は柳澤吉保の側室正親町町子のことと思しい。柳澤吉保は申すまでもなく、大老格に至った徳川五代將軍綱吉の側用人である。書状は「梶女」が「町子君」の近況を伺い、自詠和歌三首の添削を願う内容である。

梶子の出自・生没等明白ではないが、『近世畸人伝』^{注一}や梶子の家集『梶の葉』^{注二}序文によれば、京都祇園社の鳥居の傍らで茶店を営み、生涯独身で過ごし、養女百合子に店を継がせ、巧みな歌詠みとしてその名は洛中はもとより地方にも喧伝されていたという。因みに書状に見える自詠三首は『梶の葉』に収載されていない。

一方、町子は、靈元院歌壇で活躍し、武家伝奏を勤めた正親町公通を父に、江戸城大奥総取締に至った右衛門佐局（水無瀬氏信女）を母に誕生。中世の古典学者三条西実隆の正当な子孫として文芸の香り高い血筋に連なる。しかしごく最近まで、正親町実豊（公通父）が祇園の芸妓に産ませた女兒とする説が専らで、正確な出自が伏せられて来た。町子は京都に生まれ育ったが、右衛門佐局の強力な誘いに応じ、十五六歳で江戸に下り柳澤吉保の側室におさまった。以後町子は、実父公通を窓口に、吉保・吉里父子を靈元院歌壇につなぎ、父子は靈元院や堂上歌人等の和歌添削を得る。歌才・文才を持ち合わせていた町子自らも「如葉千首」を詠じ、それが仙洞の官庫永久保存の榮譽に浴し、吉保の榮華の記録『松陰日記』を『源氏物語』の筆致を模して書き綴り、結果柳澤家を武家歌人の家としても後世に伝えたのであった。

では「梶女」と「町子君」の間にはいかなる関係が存してこうした書状が残るのであろうか。本稿は新出史料「梶女書状」を起点とし、『梶の葉』を解析しつつ、梶子の出自と町子の関係を考察するものである。

（二）梶女書状

「梶女書状」を翻刻しておく。翻刻にあたっては、逐条の改行は控え文字を追い込み、句読点・濁点を私に施した。

一兩日ハのどかにて暮らしよく、如何候かし、いよく御揃遊し御機嫌の御事や、まことに此ほど逸はならるゝ也、御入らせ戴、有難く、久々にて御留めも申上げ度ながら、御心急ぎの御事、差し控へバ残り多く、

雪の中に梅の初花にほはずば春くることをいかでしらまし

野山にハ春のけしきもみえなくに垣ねのうめは咲初にけり

鶯に告げたやそのゝ梅の花春をしれとや咲初にけり

御笑ひぐさ、よろしくおぼし召、御加筆願上候、

梶女拜

町子君御もとへ

書状の背景が漠然としていて解読にもどかしさを感じるが、一応の口語訳は次のようになる。

ここ一兩日は長閑で過ごしやすい中、如何お過ごしでしょうか。いよいよお揃い遊ばし、御機嫌麗しくていらつしやいませう。本當にこの程は勇み立つ思いました。当方へおいで戴き、有り難く、久々なのでお留めとどめたいと存しながら、お心慌ただしいご様子に遠慮し差し控えましたが、その分、心残りが多くて。

雪の中で梅の初花が匂わなかったなら、春が来たことをどのようにして知ったことでしょうか

野山には、まだ春の気配も見えないのに、垣根の梅は咲き始めました

鶯に告げてやりたい。(祇の)園の梅の花はもう咲き始めましたよと

笑いぐさはご寛宥戴き、加筆をお願い申し上げます。 梶女拜

町子君御もとへ

本論では、右のうち「御入らせ戴、有難く、久々にて御留めも申上げ度ながら」と、三首詠への加筆依頼に焦点を合わせる。「御入らせ戴」云々は、以前にも町子が梶子を訪問した実績を語り、加筆依頼は、詠歌指南を介在させた二人の交流を推測させるからである。

(三) 『梶の葉』序文の解析―第一部―

『梶の葉』は、歌集全体の二割以上を長大な序文が占め、それは三部に分けられる。以下(三)(四)(五)と三項に分け考察する。

をとこもすけるやまとうたは女すらよめり、しかあればをとこ女のなかをもちやはらげ、たけきもののふのこころをもなぐさむるところつらゆきのぬしもかきたためれ、かけまくもあまのうきはしのもとにして、二はしらのおほん神のあなうましとみやびをかはし給ひしはながきいもせのはじめとかや、久かたのあめにして下てるひめのこと葉にはもろ神の心をさだめ、人の世にはうねめが口ずさみにておほきみがこころをなごめしとなんかのならの葉のふるきあとをおもふに、あべのひめみやよりはじめてひなぶりにいたりては賤のめあまの子のこと葉をももらさず、又古今集の序には小野小町をなんその名きこふる数にえらめり、それよりをちつかた伊勢、さがみ、いづみ式部、こしきぶの内侍、清紫の二女、俊成卿女、宮内卿、丹後さのみかきつづけんもくだくだしければもらしつ、このほかまさ木のかづらながくつたはれる代代の勅撰にいれるをうなの歌ははまのまさこのかずをしらぬたくひなるべし、す糸の世といへども大うちのこと葉の花にほひいとふかからめど、こすのひまもれいづることなければ人しらぬことなんめり、そのやむことなききはいふもさらなり、ひがきの女、しろめ、江口の君のこと葉まで集にも入れられ世のくちずさみにもすなる、いまよつのうみ浪しづかに関のひがし戸ざさぬ御世なれば、もものみちみちいやさかりにして、みやこもひなも和歌のうら波にこころをよせずといふことなんかりける、まして九重にすめる人はおのづからささ竹の大みや人のみやびやかなる風情をあふぎてその名きこゆる人もおほかり（傍線類宮川、以下同じ）、

書き出しは、『土左日記』が女性に仮託し、「をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみんとてするなり」と起筆するのを真似る。以下紀貫之の『古今和歌集』仮名序（以下仮名序と略）を彷彿させる筆致が続く。例えば、「をとこ女のなかをもちやはらげ、たけきもののふのこころをもなぐさむる」は、仮名序の「をとこをむなのなかをもちやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむる」に、「久かたのあめにして下てるひめの」は、「ひさかたのあめにしてはしたるひめに」に、「まさ木のかづらながくつたはれる」は、仮名序末尾近くの「まさきのかづらながくつたはり」にほぼ一致している。

こうした一致や類似は仮名序に限らない。「いまよつのうみ浪しづかに」とあるのは、『松陰日記』序で家康が天下平定を成し遂げたことを述べる箇所
に、「四つの海 波の音聞こえず」とあるのに、「さのみかきつづけんもくだくだしければもらしつ」は、『源氏物語』の文末に顔をのぞかせるいわゆる
草子地と酷似していて、『松陰日記』に多用される省筆の調子なのである。^{註五}

また『梶の葉』序文が裝飾過多であるのは一見して了解されるが、『松陰日記』卷三十「月花」に、

今はた山路の露の深き御心掟かしこくものし給ふにつけても、松の響き、水の音なひ静かなる寢覚く、もとより掻き崩し思ひ出るまゝに、(略)
さるはつゞきの浦の続かぬ女文字は、浜の真砂の千々が一つも拾ふまじけれど、もとより藻に埋もれぬ玉柏光殊なれば、自ずから隠れなき業になん
(一〇六四頁)

などであるのは、『梶の葉』序文の雰囲気に重なる。

さらに町子の「如葉千首」^{注六}自序において、吉保から千首和歌を詠むよう題を与えられ、「……いてや山の井のくみしらぬみちにしあれと、いなひ侍らむもさすかにて、心は筑波山しけき言の葉も分けみまほしけれ」としたり、千首を靈元院に献上したところ、大いなるお褒めにあずかり院の官庫永久保存の榮譽を得たことを知って、

昔女の歌の世々きこふるために、伊勢、小まちなどをはじめて、さまざまにおほかめるを、みつからおほけなくおもひかけしにはあらで、月花の
をりにふれたる情みすぐさぬ計は、みにくき人のゆやみをまなひて、いよくをのれをしらすとか。浜千鳥跡とゝむへきふしもあらさめるをおもほ
えず、かすみのほら(私注・靈元院)の春の光をうけて谷の下草世にあらはれ、よもきかものむしの音、雲の上まで聞へあけつれば、つぬにくれ竹
のよをへてくちす。あめなかくつち久しくとまれんこと、まことにはこやの山の月あまねき御代にあひ、千とせの松、色かへぬかくれししなり
とて

と綴つたりしているのは、『梶の葉』序文と殆ど距離を感じさせない。

『梶の葉』序文は、「やつがれ」「武陵遊土蛙鳴子」と自称し男性の手を思わせるが、『松陰日記』や「如葉千首」と比較する時、見え隠れする高い教養、
和歌への造詣、表現の類似を勘案し、町子の所為ではないかと思ひ至る。

その目で見ると、「武陵遊土蛙鳴子」は、「歌を詠まないはずがない」江戸の風流人の意で、『古今』仮名序冒頭近くに、「花になくうぐひす水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるものいづれかうたをよまざりける」とある、あの蛙に喩えていると理解できる。仮名序を駆使した町子なら、大いに考え得る命名であろう。

(四) 『梶の葉』序文の解析—第一部—

序文の第二部は、梶子の出自・環境を語る。多く現代の辞典類が採り上げる箇所でもある。

ここにちはやぶる祇の園のほとりに茶店のいとなみをなせる梶といへる女あり、そのころばへやはらかにしていやしからず、いとけなきより父母によく孝をなしていとなみのいとまなきすさびにさうし歌物語などにすきて、立ちやすらへる人の心ありげなるにはふるき歌のころばへをひそかにとひききていつしかみそぢ一もじのなさをしりて花に月に口ずさめることになりぬるぞ、かかれば心のたくみにしたがひてやさしきすがたもすくなからぬにや、ゆきかふ人の耳とどむることとなりにかば世のすき人はさらなり、さるはたふときかたにもやさしきためしにきこえけるとぞ、これなんいやしき身といへども和歌の徳にて侍るならし、あるはあだあだしきすきものはたはれたる歌よみてそのかへしをものせよといひさわぐもおほく、あるは心あるぬなかうどはその言の葉ひとつふたつうつしても都のつとといひひろめけるほどに、むべなるかな、あづまのはて西の海のほとりまでかうばしき名は流れずといふことなし、

右を簡条書きにして示してみよう。

- 祇園社の傍らに茶店を経営する梶と名のる女がいた。
- 性分は柔和で品位を備えていた。
- 幼い頃から親孝行であった。
- 忙しい茶店経営の合間には、御伽草子や歌物語などに心を寄せていた。
- 茶屋に立ち寄る風流人らしい客人に、古歌の解釈などをひそかに質し、いつしか和歌の情緒を理解し花鳥風月を口ずさめるに至った。
- そうなるると生来の歌才に相俟った、柔和な歌体も紡ぎ出され、行き交う客人が耳を傾けるようになった。
- 世間の風流人には勿論のこと、身分高い方の耳にも優雅なところみとして届き、出の賤しい梶女ながら和歌の恩恵に預かったと言えよう。

○ある場合は、浮気な風流人が戯れ歌に返歌をせまり、ある場合は、情篤い田舎人が梶女の歌一、二首を写し京土産だと言い広めるうちに、なるほどもつともにも、東の果てから西海の辺りまで、梶女の名声が聞こえない所はなくなったのであった。

茶店経営の傍ら、風流人に質しては歌才を磨き、ついに全国規模の称賛を得るに至った梶子の成功談は知り得ても、「いやしき身」以上の彼女の本当は見えてこない。

(五) 『梶の葉』序文の解析―第三部―

第三部である。町子と思しき蛙鳴子が京都へ半年ほど滞在、梶子と交流を持ち『梶の葉』に序文を寄せる経緯が語られる。

やつがれことしいぬのきさらぎのはじめ武蔵野の霞をたち出でて都の春をたづねさまよふついでに、ひがし山の花のもとにあそびてかの茶店にやすらひ、よめる言の葉をきかまほしくてせちにいざなひければ、いな舟のいなびはてずひとつふたつかきほどの歌なりとて書いてみせつ、まことやつたへききしよりは心の泉ふかく言葉の花匂ひまさりていとめづらかなるふしもまじれり、これよりをりをりかの林のかげをわけて旅ごろもなれゆくままに草葉の露心おかぬさまになん歌物語などせし事たびたびなりしが、文月のすゑやがてあづまにくだることに成りしかば、れいの都のつとにみぬ人にもみせまほしう、和歌のうらの玉藻かきあつめたるふみやある、みせてよとしかまのあながちにせめければ、まめやかにものせぬよしとかくいひまぎらはしけるほどに酒などたうべけるゑひのまぎれ玉手箱ひめおけるものを見出せしに、まろがれたる反古やうの物なりしかば、ひそかに袖にしてかへりて見侍りしに、かのかきおける玉藻なりしかば、ふかきほいとげぬとうれしくて、とみにうつしてかのがりにかへしぬ、さりとして我ひとりもてゐなんもをこがましければ世のすき人にもみせまほしくてちかきうきねの加茂の川水にみじかき筆をそめて杵にいのちながうするものならし、

宝永三の秋文月その日 武陵遊士蛙鳴子

こども箇条書きにしてみよう。

○今年戊の年（私注・宝永三年）二月初旬、武蔵野を春霞とともに出発して上洛。

○京都の春を散策するついでに、東山の桜を愛でてあの茶店に立ち寄った。

○梶子の詠歌を聞きたくて熱心に誘いかけた。

○拒絶しきれない梶子は、最近作だという一、二首を書いてみせた。

○なんと噂で聞いた以上に歌の心の泉は深く、言葉の情趣も勝り、希有な詠み口も混じっていた。

○以後、逗留に慣れ行くままに、祇園囃子の聞こえるその茶店を尋ね、梶子と遠慮なく歌物語などすることも度重なった。

○七月末にそろそろ江戸へ帰ることになった。

○多くの客人がするように、都土産だと人にも見せたくて、秀歌を書きためたものはないのか、見せて欲しいと強力に要請した。

○梶子は「まともにもまとめてありませんわ」と言い紛らわす。

○酒を与え酔わせておいて、手箱に隠していたものを見つけ出した。反古の寄せ集めのようであった。

○袖に隠し持ち帰って見ると、梶子を書き置いた珠玉の作品ではないか。本意を遂げた嬉しさに、直ぐに書写し原本は返した。

○梶子の作品を独り占めするのも凶々しいと思われ、世間の風流人にも見せたくて、浮き寝の宿近くを流れる鴨川の水に下手な筆を染めながら序文を書き始めた。

○母、その人によって生かされた命を大切にする契機となるかもしれないと思いつつ（唐突に映るこの一文については後述する）。

脚色の程は割り引くとして、かくして町子は梶子の作品に序文を添えるに至った。もつとも翌宝永四年の『梶の葉』刊行^{注六}までには、町子も梶子も共に編纂や推敲をしたのは間違なからうが、それらしき史料は見出していない。

(六) 母恋の歌語り

町子と梶子の関係をさらに深く探るため、『梶の葉』の歌集部分に分け入ってみよう。巻上・中・下からなる歌集の巻上には、独詠・贈答併せ三十一首が収載されるが、冒頭近く七番歌の詞書は次のようにある。

ある人の許より

心ざしふかくありげにいひかはし侍る女の、あふことはいとかたかりけらし、ある日まかりて侍るに、ちひさやかなる人形の夫婦いますを手づから送りて侍りしかば、袖に手にしばしもはなたず、人めだになき折ごとにはとり出でて見侍るに、中中むつまじきいもせのなからひもねたくさへおぼえ、あはぬことのいとどつれなくなりはべりぬ、されど手をもはなたずうちまもり侍るとて

あふことはなほひとかたにつれなきをなむつまじきかたみなるらん(七)

といひおこせ侍りし返しに

ひとかたにうらみなはてそあふことは二世をかくるかたみとをしれ(八)

『梶の葉』には、「ある人のもとより」と書き出す詞書を持つ歌が十三首ある。全収載歌一四八首に占める十三首は無視できず、「ある人」を町子に置き換え解読してみたいのである。既に考察したように、『梶の葉』序文は武陵風流士蛙鳴子に仮託した町子の作と推測された。その町子が歌集にも登場し、男女の情愛にこと寄せつつ梶子と贈答をなす——という視座を持たないと、『梶の葉』の裏をあぶり出すのは困難に近い。右引用も、読み流せば人形を介在させた男女の別れ話とうつつるが、

町子君から、

「愛情ありげに言い交わした女性がありました。ところが会うのがとても難しくなったらしく、ある日退出致しますと小さい夫婦人形めおとを自ら贈って

くれたのです。それを片時も離さず、人目のない折ごとに取り出しては愛おしんでおりました。しかしかえって人形の仲よさそうなのが妬ましく、殆どかまうこともなくなりました。それが形見となってしまつて」と詞書があつて、

以前のようにかまうことはなくなつた人形なのに、どうしてこうも心引かれる形見となつてしまつたのでしょうか

と言つてお寄越しになつた返歌に、

ひたすら人形を恨むことはなさらず、この世での親子関係を形見として大切にしてください

と解釈してみると、男女の別れ話以外が想定できる。そこで「いひかはし侍る女」を右衛門佐、町子と梶子を姉妹と仮定してみよう。

右衛門佐は常盤井の召し名で新上西門院（靈元院中宮鷹司房子）に仕えていた。正親町公通と婚姻し町子を産むが、五代將軍綱吉の御台所浄光院（鷹司信子）の要請で夫と離縁し单身江戸に。右衛門佐を名乗り大奥総取締に至る。その時点で町子を江戸に呼び寄せ柳澤吉保の側室にしたのであつた。

詞書は、江戸下向を直前に控えた右衛門佐が見せた母親らしい心遣いと、受け取る町子の反応と解釈できる。町子の悲しみを慰めようと右衛門佐は人形を与える。案の定、町子は片時も離さず悲しみを紛らわす具とした。しかし母親に会えない自分に比し、常に幸福そうに一对でいる人形が妬ましく、次第に心になけなくなつていったのが、今では母の形見となつてしまつたのだと。

総じて『梶の葉』には、多くを推測し補足しなくては含意を読解できない難解な文章が多い。そこには遠回りしたり、ぼかしてしか表現できない制約、恐らく町子と梶子の関係を世間に知られてはならないそれが存在したのであろう。母と呼べず、会うこともままならぬ女むと。その身代わり人形が形見となつてしまつたのである。だから町子は詠む。「どうして本当の形見となつてしまつたの」と。それに対し、「人形を恨んでも栓無ついこと。この世で母上と親子であつたことを形見とお捉えなさいませ」と梶子は姉を慰める。この歌語りには、母子の別れの悲しさを吐露する姉と、受け止めて慰める妹の細やかな情愛が看取できる。

では何故母の形見云々なのか。『梶の葉』序文は、宝永三年二月初旬に上洛した町子が、同年「秋文月その日」に序文をなし終えるまでの約半年間を、妹との実り豊かな交流に浸つていたかに見える。しかし実は同年三月十一日、右衛門佐は江戸に逝去。町子は生母の服忌を京都で過ごすことになつたも

のと考えられる。識語に「秋文月その日」とあった。「その日」とは、勿論梶の葉に因み七日と解するのが素直なのであろうが、母親の祥月命日、つまり七月十一日を指すとも考え得る。その場合、序文末尾に、「柞ハナハにいのちながうするものならし」とあるのは、「柞ハナハ」を「母、そこに、」として、「母その人によって生かされた命を大切にする契機なのであろう」の意で、首尾呼応させたかに映る。前項(五)で「唐突に映るこの一文」として後述を約した箇所でもあるが、町子の当時の心理状況が思わず書かせた一文ではなかったか。

ところで『松陰日記』は『楽只堂年録』^{注九}の記事の大半を踏まえ、女子おんなども供を対象にした注釈書とも言える存在なのである。ところが宝永三年相当の「卷廿三 大みや人」だけは例外で、二月十一日の家宣(六代将軍)の柳澤邸御成の盛時が綴られて後、右衛門佐逝去も含め半年相当の記事がない。しかも『楽只堂年録』には、「右衛門佐の局、今日死去す」(第百八十三・三月十一日の条)とある。

記事のない半年とは、町子が上洛していた時期に重なる。もともと当初から半年の予定で上洛したのではなく、生母の服忌により滞在が文月に及んだのであろうが、結果として梶子と十分な交流が持て、『梶の葉』序文を書き、その推敲・編纂にも手を染めることができたのかもしれない。

(七) 敷島のみちしるべ

ここでは、『梶の葉』巻上の末尾近くの記事から、町子と梶子の和歌を介在させた交流の実際を考察する。

風のすがた水の心もいさしら波のよるべさだめぬうたかたのこぎゆく舟のかぢ枕かはさむことはおもひよらねども、ただ敷島の道しるべときけば、其心のたけもはかりしられず、花になく鶯水にすむ蛙までうたをよまごらんはなしといへども、心をよする人まれなるに、かかる女の心ざしこそありがたう侍る、詠じおかれし歌聞え侍れかしたとづね行きければ、人めのさはりありて、むなしくかへりよみてつかはしける

おとにのみ聞きしよりなほ袖のうらのみるめにまさるわがなみだかな (二三)

といひおこせ侍りし返し

みるめうきはかなきあまの袖の浦にいさしら浪の立ちしばかりを (二四)

みやこ人のうたなりとて吾妻にて見はべりし人に、道のゆく手にふとまみえよみおける歌など見はべりしほどに、かく

聞きしより見しことの葉のいろふかくにほひをそふる花の一もと(二五)

といひおこせたるかへしに

われこそはこのことの葉の花の香をあかずたもとにふかくうつさめ(二六)

大方の意味は、

風の姿や水の心を知らないで、白波に浮かぶ泡沫うへかたながら、寄る辺なくも漕ぎ行く舟に梶枕を交わそうとは思わないが、和歌の道の標しるべと聞く人の心深さは測りがたく、花に鳴く鶯、水に住む蛙まで歌を詠まないものはないと古今仮名序は言うけれど、実際に和歌に心を寄せる人は希で、こうして和歌に志す女性の存在は得がたい。詠歌を披露して欲しくて尋ねたところ、人目が妨げで目的を果たせず空しく帰って来たので詠んで遣わした。

樽に聞いていたより会ってみて、よほど感涙に袖をぬらす結果となりました

と言い寄越した返事に、

海松みまのように見るかいてもない海女の袖ですが、白浪のようによく知らないあなたが寄せたばかりに涙で濡れてしまいました

都人の歌だと江戸で拜見した詠み手に、旅先でたまたまお目にかかり、詠みおいた歌などを拜見してこのように、

聞いていた以上に拜見した歌は、色深く匂いも備わる一本の花そのものでした

と寄越した返事に、

私こそ戴いたあなたの歌の花の香を、いつまでも袂に深く移しおきたいものです

とでもなろうか。

詞書の書き出しの修辭を多用する修飾過多の文章は、町子の『梶の葉』序文や『松陰日記』を彷彿させる。町子が梶子に直接会って歌に触れ感動しきりであったこと、梶子が姉の歌の詠み口（花の香）を忘れないよう身に備えたいと思っていたことが伝わってくる。しかし、この箇所からも二人の関係をたどることは出来ない。

（八）梶子の歌才

『梶の葉』序文で梶子に称賛を贈った町子が、同様の称賛を繰り返すのが次である。

友とする人にいざなはれて夕ぐれ過ぐるほどに、みちたどたどしけれど、女のあるじの歌よむ人となんいへるやどりに入りて、その事かのこと
などかたらひもてゆくに、ふるくよみたまふる歌とてかずかずをしるしてみせ給ふるに、遠く聞き遙におもへるは数にもたらず、となふれば其
吟玉に声あり、思へばそのころ錦にひかりあり、きくをたふとびみるをいやしくなすとは古人のそらごとにや、其歌のなかに、寄露恋といへ
るに

たれにかはかくとゆふべの袖のつゆぬるもほすもころひとつを（四九）

とあるにいささかならひて

袖の露ぬるもほすもしらぬ身にかかるころのみちしるべせよ（五〇）

解釈しておこう。

友とする人に誘われ夕暮れ過ぎに女主人が歌詠みだという家を訪ねた。あれこれ話が弾むうち、古くから詠んで来た歌の数々を見せてくれた。それらは遠い地で噂だけ耳にし想像していたのなどもの数ではなく、朗吟すれば歌に声が備わり、つくづく見ると歌の魂が光を増すようで、聞くを尊び、見るを貶めた古人の言は偽りかと思われる。その中に、「寄露恋」題の歌があった。

「いたい誰に袖の涙を」「こんなふうには」と責任転化できよう。濡らすのも乾かすのも私の胸ひとつにかかっているのだものと梶子が詠んでいたのにいささか倣って、

袖の涙を濡らすのも乾かすのも知らない私に胸ひとつと言える方法を教えて欲しい。

「友とする人」は、あるいは姉妹の実父正親町公通かとも思うが今は触れない。「女のあるじの歌よむ人となんいへるやどり」は、梶子の茶店と思しい。ここでは町子が、「悲しいからと誰に責任転化できましよう、心持ち一つにかかる問題ですもの」という梶子の歌を引き、母を亡くした悲涙の処理方法を乞うている。こうした梶子の自己制御法は、厳しい環境を生き抜く間に、自然と身につけたものであったのかもしれない。ここに想起されるのが『梶の葉』巻上の巻頭近くに、

十四になりけるとし、歳暮恋といふ事を人のよませ侍りければ

こひこひてまた一とせもくれにけりなみだのこほりあすやとけなん(三)

とある記事である。十四歳の梶子が、「歳暮恋」題で、「この一年も恋しくて恋しくてたまらない中で過ごしたけれど明日は立春。凍り付いていた悲しみの涙もとけてくれることでしょう」と詠んでいるのである。この恋は男女のそれではない。梶子が肉親の誰かを「こひこひて」いるのである。背景に何があるかはここからだけではわからない。しかし、町子を「ぬるるもほすもころひとつ」と論ずる梶子は、もはやあの十四歳の彼女ではない。自己制御を身につけ、母を喪つて涙に暮れる町子を慰められる大人に成長している。厳しい環境を生き抜く中で会得したものと述べた所以である。

一方、「遠く聞き遙におもへるは数にもたらず、となふれば其吟玉に声あり、思へばそのころ錦にひかりあり」とあるのは、『梶の葉』序文第三部の、「まごどやつたへききしよりは心の泉ふかく言葉の花匂ひまさりていとめづらかなるふしもまじれり」と用語も文意も重なっており、換言すれば序文の焼き直しといえる。こうした現象は、同一人物の両作品への関与を推測させる。「町子が歌集にも登場し、男女の情愛にこと寄せつつ梶子と贈答をなす——という視座を持たないと、『梶の葉』の裏をあぶり出すのは困難に近い」（本論(六)九頁)とした根拠もここにある。

(九) 姉妹の別れの時

『梶の葉』巻下の冒頭近くに配される次の記事は、町子が文月末に江戸へ帰ろうとする時のものではあるまいか。

あづまよりのぼりたる人のくだるとて

わすれじな神のみその秋の月我は吾妻のはてにすむとも(九一)

と有りしかへし

よひよひはおもかげながらまちいでむあづまのはての山の端の月(九二)

次のような贈答なのであろう。

東国から上洛した人が下るといつて次の歌を詠んだ。

わすれないで欲しい祇園で見た秋の月よ。私は東国の果てに住むとしても。

とあつた返しに、

面影にすぎなくとも宵ごとに待ちうけましょう。東国の果ての山の端に昇るお月様を町子姉様の面影と見て。

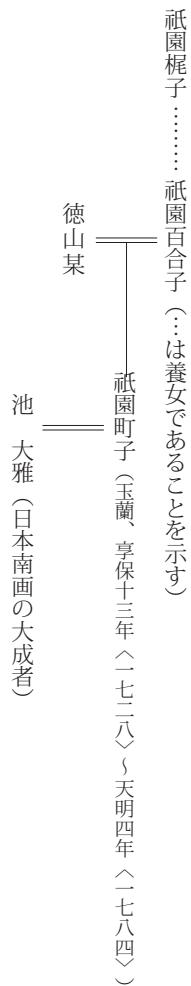
「あづまよりのぼりたる人」は町子。江戸へ下ることになり、自分は東国に住まざるを得ないが、祇園で共に見た月を忘れないで欲しいと詠みかける。梶子は東の空を毎夜眺めては、昇るお月様をお姉様として待ち受けますと返す。「まちいでむ」は、「待ち」に町子の「町」が掛けてあるのは申すまでもない。こうしたささやかなやりとりにも、かすかに町子は顔を出しているのである。母の訃報に泣いた町子も、梶子のいたわりと、和歌を介在させた交流により立ち直ったようである。

以上、『梶の葉』序文と歌集を解析して来たが、この作品は梶子の歌集というより、町子・梶子の二人姉妹が共同で紡ぎ出した歌語りと呼ぶ方が適しているように思う。この歌集に情熱的な恋愛の痕跡を探すのは難しい。恋を詠み上げていてもそれは観念的な域を出ていない。姉妹の礎いしづえが、出自を隠す生き方をそれと分からせずに吐露するところにあつたからである。それにしても、ここまで追つても梶子の出自は杳として知れない。

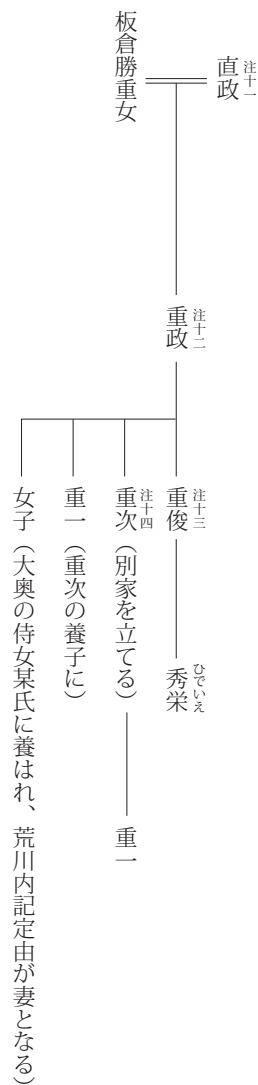
(十) 祇園梶子と徳山梶子

この項では、梶子を別な視点から考察する。

『国書総目録』で『梶の葉』を検索すると、著者の項に「徳山・梶子著」とある。「徳山」で喚起されるのが祇園百合子。生涯独身であつた梶子の養女となり、旗本の徳山某と結婚して町子（玉蘭、日本南画の大成者池大雅の室）を産むが、徳山某の帰府にともない離婚したと伝わる。注十略系図は左である。



辞典類は「徳山」を、百合子が結婚し、町子（玉蘭）を産み、離婚した相手の家名として扱う。しかし『国書総目録』に見たように、梶子が既に徳山姓なのである。『新訂寛政重修諸家譜』（以下『寛政譜』と略）の徳山（巻第三百八・『第五』三三六頁）を見よう。徳山は「トクノヤマ」で、坂上田村麻呂四代の孫が、美濃国大野郡徳山を領したのを始発とし、その末孫の養子が土岐氏庶流として家を継いでいった。『寛政譜』に名が上がる貞信から七代目以降の略譜が左で、代々將軍家の直参、即ち旗本である。

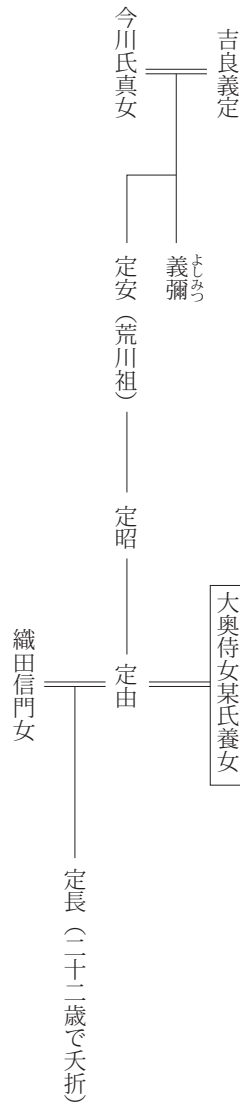


ここで女子の尻附けに「大奥の侍女某氏に養はれ、荒川内記定由が妻となる」とあるのが気に掛かる。

『寛政譜』の荒川（定利支流、卷第九十三・『第二二三三頁』）は、吉良義定を父、今川氏真女を母とする定安を始祖とする吉良の分家と知られ（系図は次頁）、定安の孫が荒川定由^{（定由）}。定由は寛文十年（一六七〇）生まれ。宝永三年（一七〇六）十一月に家督相続し寄合（三千石以上の旗本で無役の者）に列す。同六年（一七〇九）十一月御使番（諸国の巡察や大坂・駿府などの要地への出張を任務とする）となり、以後関東・東海を巡検。享保二年（一七二七）二月、勤務不手際により小普請へ降格、一時出仕停止になったこともあった。同六年（一七二二）八月逝去。五十二歳。「妻は、大奥の侍女某氏が養女、後妻は織田能登守信門女」とあり、尻附けの確認がとれる。ただし定由には後妻が入っているのに推し離縁したと見える。因みに織田信門女を生母とする定長は、享保十一年（一七二六）五月に二十二歳で夭折しているから、宝永二年（一七〇五）生まれ、定由三十六歳時の子であった。定由はそれまでに先妻と離別し、後妻と婚姻し、子をなしたわけであるから、離別は元禄十六年（一七〇三）頃か。その時の先妻の年齢は未詳であるが、定由より年少とみて、二十二、三歳から三十歳くらいの幅が考えられよう。

さてこの「大奥の侍女某氏が養女」の女子が梶子ではないかと考えるのである。女子は大奥侍女某氏に養なわれ、徳山重政の養女となり徳山姓を名乗る。その後荒川定由に嫁いだが離婚。徳山姓にもとどる——と考えると、『国書総目録』が『梶の葉』著者を徳山梶子とすることに不思議はない。梶子は生涯独身であったと言われて来たことに足を掬われていたが、出自や経歴を隠す必要があり、独身とされたただけであつたかもしれないのである。本論

(一) で既述したように、町子も最近まで正親町実豊(公通父)が祇園の芸妓に産ませた女兒とする説が専らで、正確な出自が伏せられて来た。梶子の出自の隠蔽も同様の事情に拠るかと思えた時、大奥侍女某氏とは、右衛門佐その人ではないかと思に至るのである。



(十一) 梶子の出自の試論

梶子の実父は正親町公通ではないのか——これが試論の核心である。

梶子が営んだという茶店。茶店は茶屋と同義で、寺の境内などで茶菓子(か)を供す掛茶屋、遊里で客に芸妓や遊女を呼んで遊ばせた御茶屋の二種類あるが、祇園といえば花街。これも、御茶屋と考えておく。

さて、右衛門佐が单身江戸へ下向以後、公通は祇園の御茶屋の妓女と関係、町子の異母妹梶子が生まれる。その御茶屋は、梶子の生母が経営し、後に梶子が継ぐことになるのではなかったか。正親町実豊が祇園の芸妓に産ませた女兒が町子だと信じられて来たのに鑑みても、公通が祇園の芸妓に梶子を産ませても唐突ではない。梶子は祇園で生母の手により育てられた。勿論公通も何らかの関与はしたのである。『梶の葉』序文に、「立ちやすらへる人のところありげなるにはふるき歌のころばへをひそかにとひききて」とあった、「ころありげ」な人に公通をあててみる時、靈元院歌壇の主要な歌人公通が、我が子に和歌の手ほどきをなす可能性は充分想定できる。梶子の歌才は、父親譲りで、加えての教育により凶抜けた輝きを見せたものであろう。

ところが梶子は十四歳の年、江戸へ下る。元禄六、七年（一六九四、九五）のことと思われる。一方『松陰日記』の「十五、山水」には、元禄十六年（一七〇三）二月、京都にあった祖父正親町実豊の逝去を悲しむ町子が描かれ、そこに次の記述がある。

まだいと十六ばかりの年にかありけん。御所に侍ひ給ふ右衛門の佐のさる縁にて、「東にて身の置き所も物すべきを、かくてありなんよりはとかく思ひたちね」など度々言ひをこせ給へるに、……下りにけり（三段）

町子が十六歳の頃、大奥総取締に至った母親の勧めで江戸へ下り、柳澤吉保の側室に収まった経緯を語るものである。町子が十六歳の頃とは、元禄六、七年に相当する。これは梶子が江戸へ下ったと思われる時期に重なり、町子と梶子は時を同じうして江戸へ下ったものと考ええる。二人とも一旦は右衛門佐のもとに身を寄せた。身の振り方が決まるまで大奥の親戚筋を頼る例は、卑近などころでは野々宮定基女幾子の場合にも見られる。^{注十五}

梶子は右衛門佐が腹を痛めた娘ではない。しかし、家庭を捨て单身江戸へ下り、この度は町子を半ば強引に引き取り、柳澤吉保の側室にと考える右衛門佐には、当然前夫への遠慮があつたはずである。その公通から梶子の将来を託されたとしたら拒否はしにくい。右衛門佐は梶子を、「大奥の侍女某氏に養はれ」た女子としてしばし面倒を見た後、徳山重政の養女にする。そして徳山梶子は荒川定由に嫁した。徳山と荒川の縁組みに正親町の名を介在させる必要はなく、こうして梶子の出自の本当は隠された。考えれば町子の場合も略同であつた。吉保側室になるにあたり町子は、右衛門佐——桃井内蔵允（田中氏）——町子という、仕組まれた親子三代の系図に組み込まれた。それもこれも出自の本当を隠すためであつた。^{注十六}

（十一） 祇園に生きる

大人の都合により出自を隠して生きなくてはならなかつた町子や梶子。梶子が『梶の葉』巻上で、「十四になりけるとし、歳暮恋といふ事を人のよませ侍りければ／＼こひこひてまた一とせもくれにけりなみだのこほりあすやとけなん」と詠んだ歌の、「こひこひ」た対象は肉親の誰かであろうと述べておいた（本論（八）十四頁）。梶子は十四歳頃に町子と共に江戸へ下つたと予測したが、^{注十七}この歌はまさに京都を、生母を慕う心持ちを吐露した歌ではなかつたのか。それを、おませな少女の恋の涙と解せるのは、歌の中ですら出自を世間に悟られない配慮が求められていたからだと察しられる。多く大人の都合に従うしか生きゆく術のなかつた当時の女性達。梶子は江戸に生ることに順応できなかつたのかも知れない。それでも持ち合わせた歌才で、かろう

じて自らを表現し得たのである。

さて荒川定由に嫁した梶子は離縁したらしい。その時の年齢は二十一、三歳か。定由との年齢差は十歳ほどになる（本論（十）十七頁）。数年の結婚生活としいが、系譜に見る限り梶子を生母とする子はいない。荒川との離縁の原因もそのあたりにあったか。その後、養家徳山に戻りにくかった梶子は京都祇園に戻り、所謂祇園梶子となったものと思われるのである。

従来語られて来た祇園三女の系譜は、生涯独身であった梶子が百合子を養女にして店を継がせ、百合子は徳山某との間に玉蘭をもうけるが別れてしまったというものであった。百合子・玉蘭についての考察は別稿に譲るが、徳山某と百合子の結婚は、梶子が徳山姓であったことと無関係ではなく、徳山某は梶子の系図上の兄重次あたりを推定している。いずれにせよ、正親町町子・徳山梶子・徳山百合子・池玉蘭という四女を、伝承に引きずられず、調査・考察し直す時が来ているようである。

（十三） 結びにかえて

最後に「梶女書状」の書かれた時期を特定しておきたい。それは宝永五年（一七〇五）師走ではないかと考えるが、まず宝永五年の略史を見ておこう。三月八日、京都は大火に見舞われ、御所をはじめ、正親町邸も含め公家の屋敷の多くが焼失した。因みに、『梶の葉』序文三部末尾に、「ちかきうきねの加茂の川水に」とあったのは、上洛した町子の宿所の位置を語る。正親町家は御所の東側、鴨川の西側の、荒神橋西の橋詰を少し北に上った所にあつたから、「加茂の川水」の至近距離で、町子は実家を宿所にしていたのであろう。

三月二十七日、尾張徳川綱誠女つなよしめが、松姫と名乗り綱吉の養女となる。

七月二十六日、柳澤吉保は、鴨川にかかる荒神橋の西の橋詰めに、五千坪強の京都屋敷を拝領。大火に懲りた幕府の、洛中見回り強化策であったと思われる。ここは正親町邸とは目と鼻の位置関係にあたる。注十九

八月二十三日、幕府は京都再建の援助金を支給、正親町家も二百両拝領している。

十一月十八日、松姫が加賀前田家の、松平吉徳よしのりに輿入れ。同月末頃までには、御所他、京都は再建されたと考えられる。

十二月十二日、松姫の輿入れを祝い、禁裏から幕府に進上物が届く。それに対し、同月十六日、禁裏に謝意を伝えるため、幕府は高家横瀬貞顕さたあきを使者として上洛させる。町子は、この使者一行と共に、上洛したものと考ええる。身分高い女性の一人旅は、まずあり得なかった時代、多くこうした使が利用された。町子の上洛の目的は、実家の再建祝い、吉保拜領の京都屋敷の下見したみ、そして久々に異腹の妹梶子と会うことであつた。一方、町子の上洛は、「逸はやらるゝ」状況であつた。それは幕府の使者派遣が急に決まり、町子の上洛も慌ただしかつた故ではなかつたか。同様に「御心急ぎの御事」も、使者一行の限られた旅程に、町子も合わせざるを得ず、そのための気ぜわしさと推測される。

「梶女書状」の和歌三首の検討に移ろう。「雪の中に梅の初花にははずば春くすることをいかでしらまし」「野山にハ春のけしきもみえなく垣ねのうめは咲初にけり」「鶯に告げたやそのゝ梅の花春をしれとや咲初にけり」は、ともに「梅の初花」がテーマである。しかし、町子の上洛は十二月、冬の内である。しかし『暦日便覧』注十によれば、宝永五年は、十二月二十六日が立春。「書状」書き出しの「二両日ハのどかにて」は、ここ二三日の、冬とは思えない長閑のどかさに、梅の初花がほころび始めていたのを推測させる。『源氏物語』幻巻の師走の記述に、「梅の花のわずかに気色ばみ始めて、雪にもてはやされたるほどおかしきを」とあるように、雪の散る師走に、梅がほころびることもあり、梶子の歌は、年内立春を目前に、幻巻を彷彿させるような、時宜を得たものだったとみなせる。

以上の考察の結果、宝永三年七月に『梶の葉』序文を執筆して以降で、町子が上洛し久々に梶子と再会を果たしたのは、宝永五年十二月二十日前後の二、三日であろう。横瀬等が江戸を立ったのは十二月十六日。こうした公的上洛の旅程は往復十日間ほど。早駕籠を利用すると、京都と江戸間は、片道平均三泊四日。京都到着は十二月二十日前後になる。

ではなぜ宝永五年のうちに限るのか。それは、翌宝永六年一月十日、綱吉は麻疹はしかに罹り、あつけなく薨去、柳澤吉保の時代も終わりを告げ、環境は一変してしまふからである。

祇園梶子は名は知られながら、出自は未詳であつたが、新出史料「梶女書状」により、梶子と町子は極めて親しく、町子は梶子の和歌指南役を担い、梶子は時折上洛する町子に宿所を提供することもあつたらしいことが推測されると同時に、『梶の葉』に収載されない詠歌三首の存在も知られた。その上で『梶の葉』序文を分析してみると、武陵遊士蛙鳴子は町子その人の隠れ装ではないかということ、歌集の其処此処にも実は町子が登場し梶子と贈答

をしているらしいと解読することができた。

梶子が町子の異母妹であったと認められるなら、彼女も正親町公通を父とする公家の姫。仮に祇園の芸妓が母だとしても、その血筋は賤しいとはいえない。『梶の葉』は公家の息女姉妹が、出自を秘しつつ綴った歌語りと捉えるべきであろう。そして、『梶の葉』が宮崎友禅の画を配した美麗な歌集として刊行されたのも、血筋の良さが支える背景あつてのことと考えている。

(注)

一、『近世畸人伝・続近世畸人伝』（東洋文庫二〇二・宗政五十緒氏解説）。『近世畸人伝』は江戸中期～後期の国学者伴蒿蹊著。蒿蹊（一七三三～一八〇六）は京都の人で荷田春満に私淑した。

二、『新編国歌大観 第九巻 私家集編Ⅴ』（平成三年四月初版）所収本。島津忠夫氏解説。底本は東京大学国文学研究室蔵本。『女流文学全集』第四巻（文芸書院・一九一八）にも収載されている。因みに表題『梶の葉』は、平安の昔から七夕の祭りには、カジノキの葉七枚に歌などを書き手向た風習に因む（補注 参照）。

三、この説は、「柳宮婦女伝系十三 右衛門佐局」（徳川諸家系譜第一 常憲公御代局）『続群書類従完成会』に端を発するものと思われる。以後踏襲され、殆ど考え直されることもないまま現在に至っていた。

四、全三十巻。宮川葉子著『柳沢家の古典学（上）——『松陰日記』——』（平成十九年・新典社）

五、注四同書解説「一、『松陰日記』の概略」において、『松陰日記』を『源氏物語』の雰囲気近づけているのは省筆の調子にもある。例えば「めづらしげなればもらしつ」「つゞけんもいとあまり目慣れたり」「よくも覚えねばかゝず」「そのみいひつゞくるもうるさくむつかしければ、皆もらしつ」「くたくしければもらしつ」などは「云々（二六頁）」として論じた。

六、『松陰日記』に自序と四十九首を翻刻し掲載したが（七二二頁）、国会図書館蔵の写本『千首和歌草』（清水千清遺書）巻二十・和書一八九―二〇―二三二の「千首和歌草」が「如葉千首」と思われる。

七、「心の泉」は、『千載和歌集』序（『新編国歌大観 第一巻 勅撰集編』）に、「しきしまのみちもさかりにおこりて、こころのいづみいにしへよりもふかく、こ

とばのはやしむかしよりもしげし」とあるのによるらしい。因みに柳澤吉保は自らの設計で八年を費やし、江戸駒込の下屋敷地に和歌の庭六義園を創りあげ、元禄十五年（一七〇二）十月二十一日には八十八境を定めた。その一つが「心こころ泉いづみ」である（『柴只堂年録』第四・三二頁）。六義園作庭の経緯や、八十八境の根拠を熟知していた町子が思わず顔を出したと見なしてよいか。

八、島津氏解説によれば、刊記に、「宝永四年丁亥孟暮良辰／洛陽画工友禪子図之／平安書舎通情軒彫之」とある由（七七九頁）。但し「孟暮」という語は存在せず、これは「孟冬」、即ち陰暦十月と思われる。『梶の葉』は町子が序文を記した宝永三年七月から一年三箇月後の出版であった。「当時流行の宮崎友禪の画を配した美しい歌集」（同上）誕生までには、町子の尽力は勿論、梶子を陰で支えた存在、後述するように正親町公通やその周辺の堂上歌人の存在なくしては語れない部分もあつたことであろう。

九、全二九卷。吉保の先代に始まり、宝永六年（一七〇九）六月三日、同年一月九日の綱古薨去をうけて吉保が隠退するまでの柳澤家の公的日記。この後は、継嗣吉里の『福寿堂年録』に書き継がれてゆく。書名の楽らく只し堂どうは吉保の号。宮川葉子校訂『史料纂集 古記録編』（八木書店・平成二十三年七月第一）平成二十七年三月第四刊行、以下順次刊行中。

十、『和歌大辞典』（明治書院）・『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー）。

十一、直政は慶長十一年（一六〇六）四月、初めて東照宮（家康）に謁見。大坂兩陣に供奉。御使番や大坂城の普請奉行を勤める。寛永十一年（一六三四）二月、北陸道諸国を巡見の帰路、京都において客死。四十六歳。

十二、重政は、寛永八年（一六三二）、大猷院（家光）に拝謁し御書院番に列す。寛永十一年五月遺跡を継ぐ。以後御使番などを勤め、万治三年（一六六〇）江戸本所の開拓奉行。この時、亀戸天神を草創し、深川に長慶寺を建立。その功により本所に宅地を賜る。寛文十年（一六七〇）五月勘定頭、貞享三年（一六八六）十二月致仕、元禄二年（一六八九）六月卒す。年七十五歳。

十三、重俊は、慶安元年（一六四八）六月、初めて大猷院に拝謁。時に十一歳。寛文三年（一六六三）四月、嚴有院（家綱）の日光山参詣に供奉。貞享三年十二月家督を継ぎ、二千七百四十石余を知行、五百石を弟重次に分つ。元禄九年（一六九六）、御使番。正徳三年（一七一三）十一月致仕、同五年（一七二五）三月三日逝去。七十八歳。

十四、重次は重政の二男。生母は水野守信女。寛文十年（一六七〇）十一月、嚴有院（家綱）に初拜謁し、御書院番に列す。貞享三年（一六八六）十二月、父の致仕に伴い美濃国大野郡に五百石を分けたれ分家し弟重一を養子にする。元禄九年（一六九六）年頃の忠勤に黄金五枚拜領。宝永元年（一七〇四）二月逝去。五十八歳。

十五、定基は、中院通茂息、同通躬兄弟で、野々宮の養子になった。その女子幾子は、宝永三年（一七〇六）二月、柳澤吉保の養女になり、翌四年四月、大久保忠英に入興することになるが、江戸に下った折に身を寄せたのは、定基室の姉妹で、大奥の大典侍局（北の丸局）のもとであった（詳細は『松陰日記』補注八三七頁）。

十六、生涯独身が掟の大奥の女性は、將軍の代替わり後の寂しさを予測し、多くが名跡養子を取った。田中氏桃井内蔵允は右衛門佐より二十歳以上の年長ながらその養子となり、さらに町子を養子にし田中氏を名乗らせ、右衛門佐の孫に仕立てるといふ系図が工作されたのである。工作の理由は、吉保が綱吉の能吏とし破格の出世を遂げたとはいえ、もとは下級武士出身。公家の姫を側室にされるには、堂上への憚りがあつたためと考える。それと略同の工作が梶子にも施されたと見たいのである。

十七、町子の江戸下向は十六歳ころ、梶子のそれは十四歳頃とすると、二人の年齢差は二歳となる。

十八、梶子・百合子・町子（玉蘭）を祇園三女と通称する。

十九、宮川葉子『柳澤家の古典学—文芸の諸相と環境—』（平成二十三年・青簡舎）第四章「京都屋敷—御所警護と京都火消—」を参照されたい。なお、同書六九〇～六九二頁に、「柳澤家拜領の京都屋敷」として京都府立図書館蔵の絵図面写真を掲載してある。

二十、『増補日本暦日便覧 下』（湯浅吉美編・平成四年・汲古書院）。

〔補注〕—七夕に梶の葉に歌などを書いて手向けた風習について—

梶の葉は、織女星の異称梶の葉姫のことで、古来和歌にも詠まれて来た。以下勅撰集に詠まれた例を上げておきたい。

①『後拾遺和歌集』巻第四秋上 二四二番歌 上総乳母

七月七日かぢのはにかきつけはべりける

あまのがはとわたるふねのかぢのはにおもふことをもかきつくるかな

②『金葉和歌集 二度本』卷三秋（橋本公夏本拾遺・後冷泉院御時皇后宮歌合に七夕の心をよめる） 四三番歌 一宮小弁

七夕の心をよめる

七夕のあまのとわたるかぢのはに思ふことこそかけどつきせね

③『新古今和歌集』卷第四秋歌上 三二〇番歌 皇太后宮大夫俊成

七夕歌とてよみ侍りける

たなばたのとわたる船のかぢのはにいく秋かきつ露の玉つさ

（受理 平成二十七年九月二日）

みやかわ ようこ：国際コミュニケーション学部 教授